環境大臣賞

住み続けられる故郷・福島を目指して

いわき市立桶売中学校
酒井（さかい）　舜之（としゆき）

「川前の人が減っているね･･･」祖母がつぶやくのを聞いて、実際はどうなっているのか調べてみた。いわき市のHPによると、私が住む川前地区の人口は、2011年（12年前）が1306人、2014年（10年前）は1188人、現在は831人と、大幅に減少している。元々進行していた人口減少に、原発事故が追い打ちをかけたのかもしれない。一方、いわき市全体の人口も減少はしているが、減少率は僅かだ。結果、来年度末で、私の通う桶売中学校をはじめ、川前地区すべての小中学校が閉校することが決まっている。地区から学校が無くなれば、ますます人口は減少するだろう。

この時、SDGsで掲げられている「住み続けられるまちづくりを」という言葉を思い出した。このまま人口が減少すれば、地区に住み続けることが難しくなると思うのだ。理由は2つある。1つ目は、買い物の問題だ。私の家から2kmほど離れた場所には、桶売北部で唯一の商店があり、自動車を持たないお年寄りにとってなくてはならない存在だ。しかしその経営者も高齢で、「あと何年できるかわからない」と話していた。2つ目は、病院への通院の問題だ。祖母の話だと、多少体調が悪くても、病院に行くのを我慢している方が多いという。そもそも、桶売地区では唯一のバス路線が30年前に廃止され、公共交通機関がない。近所の方の中には、子供が高齢の親を心配して呼び寄せたり、通院できないため市の中心部に引っ越したりした方もいる。とても、「住み続けられるまち」とは言えない。しかし地域の多くの方は、できる限り慣れ親しんだ場所に住み続けたいと考えている。そこで、私の祖母をはじめ何人かの方が協力してNPOを作り、お年寄りが集まれる場所を作った。また、移動手段の無いお年寄りを病院やスーパーまで送迎する制度を利用し、住み続けられるまちにしようと努力している。ただ、大きな問題があるという。それは、施設の運営や運転の担い手不足だ。

そこで私は、地域に人を集めるためのアイディアを考えた。ヒントになったのは、最近地区有志の方が始めた、大学生の自転車合宿誘致の取り組みだ。8月にも、地区の宿泊施設を利用して東京大学自転車部の方が訪れた。その時聞いたのだが、「ここは道路が整備され、自動車は少なく、その上平地が少なく坂ばかりなのですごく練習になる」「地域の皆さんが温かく励みになる」「高地でとても涼しい」と絶賛していた。さらに将来のことが話題になったとき、「就職先は趣味で自転車を続けられる環境」と言った方がいた。ならばこの合宿の際、将来の就職先の候補として地域の魅力をPRしたり、歴史的・文化的な見所を自転車で回れるルートを紹介したりして、自転車合宿とセットにしてみてはどうだろうか。こうした取り組みを続ければ、少しずつでも若者が増え、持続可能な地域に近づくと思う。私は今後も、みんなが慣れ親しんだ場所で暮らし続けられる福島になるよう、頑張っていきたいと思っている。